

「環境未来都市・下川」への疑問 ⑤

ルポライター・滝川康治(下川町在住)

難題山積のバイオ発電構想(上)

新制度に惹かれ：

環境未来都市計画
やバイオマス産業者都
市構想のなかで、最
大のプロジェクトは
木質バイオマス発電
だ。現在、町は出力
5000キロワットの
発電所建設を想定
し、コンサルタント
業者が建設の可能性
調査を実施中。「16年
度の稼働をめざす」
(安齋保町長)が難
題が多く、道のりは
険しい。

春日隆司・町環境
未来都市推進本部長
は、発電構想の経緯
について「04年の五
味温泉を皮切りに公
共施設へ計画的に木
質ボイラーを導入し
てきたが、エネルギー
の循環が図られて
いなかった。現在、
電気で5億円、ガス
と油で7億円が町外
に出ていく。そこ
で、熱十電気でエネ

ルギー自給をめざ
し、地域経済を循環
させようと考えた」
と話す。

12年度、町はコン
サルタント業者に委
託し、「エネルギー自
給可能性調査」を実
施済み。出力150
0キロワットを前提
にビジョンを策定し
たが、その後、3倍

金の出す話に、果た
して理解が得られる
だろうか。

石油や天然ガスに
比べ、木質バイオ発
電はエネルギー効率
が悪い。これまで
は、一部の製紙工場
や製材所などが手が
けてきた。だが、再
生可能エネルギーの
固定買い取り制度

研究員のもとめによ
ると、FIT開始
後、全国で70数件の
計画が公表されてい
る(「農林金融」13
年10月号。インタ
ネットで閲覧可)。
道内では、下川以外
に王子グループの
2・5万キロワット
(江別市・15年稼働
予定)、住友林業の

5万キロワット(紋
別市・16年中)、帯
広市営の2600キ
ロワット(構想段
階)の3件がある。

道立総合研究機構
林業試験場森林資源
部の酒井明香さん
は、道内の森林から
集荷できる可能性が
ある林地残材の量を
試算した(「光珠内
季報」第167号)。
全道で年間20〜36万
トン、上川管内で同

燃料の争奪戦に
木質バイオ発電で
は、林地残材などの
確保が大きな課題
だ。
5000キロワッ
2・5〜4・5万ト
ン、上川管内で同
えなない状態だ。今

立ちほだかる燃料確保の壁

未利用材に限界、年5万トンは無理

強の規模に膨れ上が
る。「採算性や林業の
活性化を含めて50
00キロワットにし
た」(春日本部長)。
釈然としない。

事業主体は民間企
業、建設の可能性が
あった時点で町民の
出資も提案する、と
いう構想。企業誘致
を行ない、町民がお
所の安藤範親・理事

道立総合研究機構
林業試験場森林資源
部の酒井明香さん
は、道内の森林から
集荷できる可能性が
ある林地残材の量を
試算した(「光珠内
季報」第167号)。
全道で年間20〜36万
トン、上川管内で同

め、小林英彰・上
川北部森林組合参事
は「うちのチップ工
場は上川北部や留
萌・宗谷管内から原
木を調達し、日本製
紙向けと暗渠排水用
に使われる。林地残
材も極力運んで活用
しており、このエリ
アだけでは原木を賄
えない状態だ。今

後、なよろ温泉の木
質ボイラー程度なら
応援できるが、それ
以上の供給は難し
い」と説明。別の林
業関係者も「木材工
場には紐がついてい
る。製紙会社を蹴っ
て、下川に回すのは
無理だろう」と指摘
する。

先行する王子グル
ープの発電所は、年
間20万トンの林地残
材などを使う計画。
奪戦の様相を呈して
いる。



ボイラー燃料を作る下川町の木質原料施設。発電には大量の原料が必要になる